

教育実習の感想

村 端 倅 一

人は或る軍令に遵ふると自分の知らぬ間にその間が
 乏しき人々を大人にしてくれり。こうした頃人は「社会」と
 いう言葉を耳にする。実社会は荒波だ。こゝに居る中
 は学生なら象牙の塔に居ることもつて困苦勉強してゐる時
 がある。だが現今はこの象牙の塔の中に居るよりも寒い間は
 吹いてきてゐる。だが実社会を知らずして私は教育実
 習をとおしてこの実社会を知つてゐるわりのある。

教員の方は実に教生にとつては好意的である。そして私
 はそれこそ指一杯はねまわつた。思つたことほどしく
 主眼し。精一杯ぶつかつてきた。一ヶ月余りの実習が終
 えたとき、教育というものを地味な立場で多く聞く暇の
 がある。ことに感づいてゐた。なるほど理論的にはそれで
 立つても現場において二人の時はどうしたらいふのか
 といふ場に応じた考へ方の必要性を身にしみ感づきま
 した。そうして実習校やれ／＼という感じと共に白い吐息
 を何回となく吐いた。日方もまてに一度減つてゐた。
 しかし、こうしたことも苦しいと思つてもやりがいがあつ
 た。やりがいのあるものにぶつかると人は精進を致し

じめる。考えて／＼考えて出来たものが生々落着点也。
 悟つた時の昇格を今だに忘れない。こうした努力と真
 剣味が大学の勉強にむけられたら秀才といわれる日も遠
 くはあるまい。真理探究も有名無実の域を脱するであら
 う。「つらい日々なる故に生きがいがあつた」と

「一口に感想を」と向われるならば、こう答へたい。
 だがこうした一日一日の生活の中に種々のことがあつ
 た。これの中時に感じたことを二三のべてみようと思つ
 た。井の中の蛙大海を知らず。井の中の蛙が大海にたと
 いう形がまさにびつたりする。それは知らないことば
 多すぎるといふこと、優れた人物に多く会うといふこ
 とを意味してゐる。地方実習において、その学校の教頭
 さんが私に、うちの校長はもの、本質を知つてゐる」と
 いつたのを聞いて私はこの一言の中にこの校長さんのえ
 らざるを感じた。「物の本質を知つてゐる」千金の重み
 ある言葉だ。どんな校長さんか。この一言で感服してし
 まつた。それか教頭さんの言葉だけに私は一層この校長
 さんのえらざるを感じる。だがこの教頭さんも全くその



意味でも謙虚な素直しい方と想像することは難くない。若いものに負けず務台理作や高山岩男あたりをばりノ、よむ勢力を今だにもつてゐる当りなど全く成々の急腹感を脱しくさへ思つた。へ尙処世術のこととも色々見えてたがこれは省く。

の寐でゐる教師と起こゐる教師。私は前者をサウリーマン教師と呼びたい。毎日／＼同じことを繰り返して、片意を以てゐる教師と私はこの目とみてゐた。しかしいかに教師になれたとしても教師として勉めんとする一斥の良心だけは残しておいてもらいたい。それは教育への情熱を失う沈滞した教師の姿に他ならない。とくに女の教師にこれが多いように思へた。(男の教師でこの型に属するものは問題にならない) そこに一つの問題がある。結婚すると女教師はひどく変つてくるぞうだ。何故か。一々説明するまでもないが大きな原因は、「主人のよほどの理解がない限り女教師はこうなつてしまふ」という言葉がその原因をい、あてゐる寛がする。

「理想をもつてゐても若いうちだけさ。こゝろいわれるとさ、それを否定した。賢母と肯定する気持との鵲斗がある。だが四十才なら四十才の人向を十人ならべてみるとさ、その

人々の歩みし人生の違いがその人向形成となつて表れてきてゐるのを知る。情熱は失うなかれ腐排した自己勝手な虫のよい言葉に耳を貸す勿れ。こゝろした意味でも強く生きたい。若干のうぬぼれも時には必要とこゝろ感じた。そして敗北した教師とならないことだ。いつも目のあいてゐる。体のどこかに情熱ののこつてゐる。起きてゐる教師にならなくてはならないと思つた。

の夜輝くものは星也。或教生の研究授業の時、「月は星ですわ」という生徒からの質問があつた。彼は「夜輝く故に星也」と返答した。整理会のこと。たま／＼学校にきていたA教授より「夜輝くもの次第だ」という三段論法があるか。それならネオンサインも星となる」といふれたことがあつた。この一つの例の中に私は大きな問題をもち、私は何故彼がその場合こゝろ答へたかを考へる。彼にいねせれば質問が廣向だけに、小二の生徒の質問にあがつてゐたと云ふ。しかし何故こゝろ回答を無意識の中にもしたのか。そこにはやはり照視しえない問題をもちのである。これは例としてこの教生のことをあげたが、私達のおかす問題でもある。これについて詳細にかゝるは省くとして、彼は全じようなあやまちを全じ学校でやつてゐる。それは教生を代表して現れた時である。私達は皆様を教生にさました」といつてしまつたので

ある。教之にきたとは何事か。彼にいわせればあがつていたということになる。だがこの二例より私が何と問題にしたいのかを察して頂きたい。

書きたいことはまだある。実習録を閉いてみればいくらでもある。こうした教育現場には数多くの問題がころがっている。しかしこうして小石のように数多くころがっている問題一つを解決していくことは容易ではない。そこに教師の働きがあり地味な努力の必要な点がある。何段もくり返しゃる中に少しづつまれていく。仕事それが教育へ従事するものの態度である。アルプスの山さへも征服された。それは征服せんとする意欲あつたのことである。こうした強い決心と努力が失敗のくり返しの中から成功を生むのである。心の中に毛いることなく五十になつても六十になつても若き意欲をもつことが必要である。それがいつかアルプスの征服さえも可能にする。

「一時向を通して何を学びとつて欲しいのか。」「どういう子供に。」「何を、いかにして。」「どうして。」「こうしたことがいつも実習を通して頭にこびりついてゐた。」「この感想が目があつてゆつくり書けたらもつとよく考えまゝとめてもつとたくさん書きたい」というのか橋らぬ感想



である。

思つたまゝを書きならべて見た。

尚、実習成績を「優」をもらつた時、はじめて優とらつた嬉しいさを感じた。他の教科にはこれほどの感じはない。だが成績をもらうまで、「優」か「良」か「可」かと気にもならなかつた。

何故か？ それはやれるだけやつた感じが、うぬづれ、安心感と満足感となつて抜か心を往來してゐたからである。

（書 評）

児童文学入門

坪田 康二 著

生活叢書が云々される児童文学界においてのこのごろ或意味においてこれを読んでゐることば、いように思える。しかしそのことよりも坪田康二

が今日まで若き日の純粋な心へ誰でも一度はもつていたを葆ちて執筆してきた彼のたゆましい努力に胸うたれるものがある。一つの世帯に受えてならないものまでも人間より奪つていくがそれに抗しえてきた若者の姿を私は等々望んで読了したのを今でも記憶している。

（村端 倅二）